

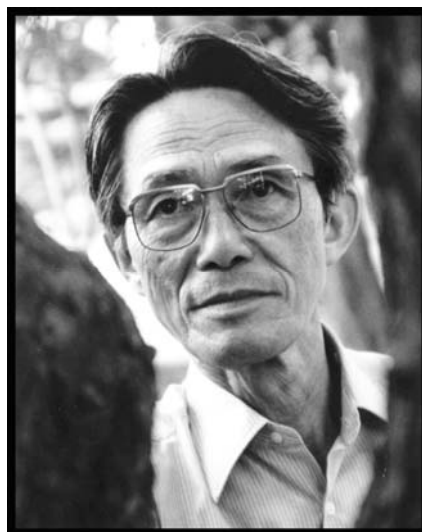
追悼 樋渡宏一先生

本会の名誉会員樋渡宏一先生は、3月7日午後0時14分、入院先の仙台厚生病院で、肺炎のため、88年の生涯を閉じた。喫煙がリスク要因の一つとみられている病を発症しては何度か入院をしてはいたが、それでも、驚くような回復もみせていた。2年程前から、奥様と同じ老人ホームで静かな日々を送っていたのに、昨年9月末にはその奥様の久子さまが旅立たれ、気力が萎えてしまったのかとも思う。

10代後半をどのような環境で育ったかは、後の生き方に大きく影響するといわれている。樋渡先生は仙台市で生を受けた。10代は旧制の盛岡中学（現盛岡一高）と盛岡高等農林（現岩手大学農学部）で過ごしている。盛岡中学の特色は、自由と自主の精神性である。蛇足ながら、私もこの高校の出身である。校歌のメロディーは軍艦マーチ（校歌が制定された明治当時はモダンだったらしい）なのに、戦後すべての軍事色が否定される中、校歌として歌い継がれてきた。自彊の精神あふれるこの中学で、2つのことがあったらしい。一つは博物同好会を立ち上げ、昆虫少年のグループの中心人物として活躍していたらしい。もう一つは、予習していかなかったため英語の時間に立ち往生した時、「君は少年昆虫学者か何かしらんだけど、外国語ができなくては学者として大成はできないぞ、科学は国際的なんだからな」と英語の先生に言われたひと言が忘れられず、英語を習得する気になったのだ、そうである。1988年の同窓会誌への寄稿文でそう述べている。流暢に英語を操る後の姿の原点がここにあった。東北大学退職後、蝶々を追いかける趣味を復活させたのも、ここに戻ったのである。

戦時中の1942年に東北帝国大学（現東北大学）理学部に入学し、卒業後は大学院特別研究生として在籍、このころゾウリムシとの出会いがあったという。終戦後間もない1949年、山形大学に講師として赴任し、その後東北大学教育学部教授、宮城教育大学教授、東北大学理学部教授となり、1984年63歳で定年退官。その5年後、新設された石巻専修大学教授となり、1995年2度目の定年を迎えている。この間、多くの学生を育ててきた。

樋渡先生は、日本に於ける「ゾウリムシ学」を興した人といわれる。主に*P. caudatum*を使って、その特色を活かした加齢現象や核の分化など多岐にわたる研究を進めてきた。しかし、興味を中心はゾウリムシの性であったと思う。内容は2つの著書、「ゾウリムシの性と遺伝（東京大学出版会）」及び「性の源をさぐる（岩波書店）」にゆずる。昨年、岩波新書創刊70周年を記念して、各界で活躍している著名人に「岩波新書のうちで、永く心に残っている本、最近読んで感銘を受けた本、他の人々に薦めたい本などの中から、一〜三冊を挙げ、短評を書いて下さい」というアンケートを岩波書店が行った。218名の回答の中で、数学者と比較文化史学者のお二人が「性の源をさぐる」を挙げている。これこそが、樋渡先生にとっての勲章ではなからうか。樋渡先生の多彩な研究を可能にしたのは、学生が、これは正に自分の研究テーマである、と思う程、徹底した研究の議論をしたことである、と私は思っている。それは、セ



ありし日の樋渡宏一先生
写真=大西成明

ミナーで行われるばかりでなく、飲み会でもスキーのときでも、いつでも可能だった。実験室側の教授室のドアはいつでも開いていた。議論の中で、ご自分で進めたかった課題を提示し、困難には一緒に真剣に向き合い、幅広い知識（単に記憶しているという意味ではない）を駆使して解決の方法を考え、成果を共に喜んできた、と思う。研究の面白さを知った若者は、もう研究の魔力に取り付かれてしまい、一人で歩き出す。T.ソネボーンが1937年にゾウリムシのmating typeを発見した時、顕微鏡下で見られる凝集反応に興奮し、誰かに見せたくて、夜中に誰か居ないか探し回ったという話をよく聞かされた。研究のオリジナリティーは発想者であり、自分の研究である、という強い自負を持っておられた。しかしながら、樋渡先生自身は、自分は残念ながらソネボーンのような経験はあまりない、と述懐したことがある。若者に喜びを分配していったのだろうか。オリジナリティーのある研究を高く評価し、悪戦苦闘して研究に立ち向かっている若者をいつも応援していた。

私事になるが、私は今から43年前、生物を専攻しても全く就職口のなかった時代に、宮城教育大学の教務職員として採用され、樋渡先生の元で働くことになった。当時は教授が、その一存で助手を決められる力を持っていた最後の頃で、私を採用したのも第一候補に断られたからだと後で聞かされた。私自身は、研究補助という就職口があったから手を挙げて応募したのであって、結果として研究の道に進むきっかけとなったが、当時は思ってみなかつたことである。私が宮城教育大学に就職した時、樋渡先生は同僚の竹内さんや武内さんと毎週夕方に勉強会をしていた。途中から私も参加させてもらったが、勉強していたのは「分子軌道法」だった。章ごとに練習問題があり、それを分担して解いていた。私も問題は解けるようになったものの、「分子軌道法」とはどういうものか、一冊終えても結局分からなかった。樋渡さんは、生物のお勉強ではなく、有機化学の勉強をしていたのである。

樋渡先生の議論好きは、研究の場だけではない。歳の上下や経験の有無、研究室員か否かに関わらず、研究のこと、科学のこと、国民性やビールのことなど、議論することに話題を選ばず楽しんでいた。流暢な英語を駆使し、国際的な場でも活躍してきたし、率直さは、外国に出ても変わることはなかった。友人が多いのも、その飾らない人柄の賜物であろう。

国内外の活躍については、次の肩書き受賞を羅列する。国際的な場では、国際生物学連合の研究連絡委員会委員であった他に、ドイツ連邦共和国・ミュンスター大学客員教授、中国ハルビン師範大学顧問教授、中国華東師範大学名誉教授の称号を授与されている。ドイツ原生動物学会からは原生動物学の発展に寄与したとして、エドアルド・ライヘナウメダルを授与されている。1971年には日本動物学会賞を受賞。1997年に日本学士院会員に選出された。当会の他、日本遺伝学会、日本動物学会、日本基礎老化学会の名誉会員でもあった。

日本原生動物学会との関わりは、発足に遡る。原生動物学雑誌36巻2号（2003年）にその当時のことを語っている。日本原生動物学会第6回及び第26回の大会長、また1989年には、第8回国際原生動物学会の大会長を務めている。体調を崩されるまでは、毎年大会に出席し、若者との会話を楽しんでいた。学会にとって特筆すべきことは、日本学士院会員に選出された時、会員には年金が出るので、その一部25万円を1998年から毎年寄付し続けてくれたことである。これは、国際交流基金として有効に使われてきた有り難いご寄付であった。

向こうの世界では、敬愛するT・ソネボーン先生や若くして旅立った研究室の仲間、平井節郎さん、茗原宏爾さん、北村昭夫さん、松田順二さんにも再会して、議論を楽しむサロンを再開しているかもしれない。合掌。

（筑波大学名誉教授 高橋三保子）